

個の強さと連携と

京都大学工学研究科 浜地 格

サイエンスは元来、個人の自由な発想から生まれると信じられている。しかし個の発想や行動原理はその背景となる時代や社会状況と密接に関係している場合も多い。本部会が発足した20年以上前、第一世代の諸先生を部会設立に駆り立てたのは、その先見性と並外れた情熱ともに、まさに状況がこのような境界領域の誕生を望んだという一面もあったのではないかと、と当時大学院生であった者として考えたことがある。節目の20年を過ぎて、周りを取り巻く環境はさらに大きく変わった。近年の NanoBio technology や Chemical Biology の勃興はその代表例であろうし、Funding 制度の改革は若手研究者に比較的大きなフリーハンドを与え、変化を加速しているように見える。それと共に、部会員が対象とする研究領域も当初の人工モデル系から生体機能分子や細胞・生体組織そのものを取り扱う方向へ大きく拡張した。「生命現象を化学の言葉で語る」、という旗印の下に研鑽を積まれる部会員個々の努力によるところ大である。

では、変革の時代に部会はどのような役割を担うべきであろうか？若輩者に明確な答えはないが、個の強さを連携へと繋げる努力は重要かもしれない。連携には様々な観点がある。時間軸を含む世代間の連携：青山部会長が言われる「第二世代」からすると小生は「第四世代」あたりに属するが、分野の面白さ、重要性、情熱を学生諸君を含めた次の世代に伝えるために、部会主催のシンポジウムや種々の仕掛けは大きな意義を持つであろう。分野や組織間の連携：Nanobiotechnology や Chemical Biology は、その定義からして、一人の研究者や一つの部会でカバーできる領域では到底ない。それぞれの専門家の真の連携がなっこそ新たなブレイクスルーが生まれることは万人共通の認識である。しかし分野や組織を真の意味で乗り越えた連携は、それほど簡単で単純ではない。部会にはこの辺にも大きな役割が期待されるかもしれない。国境を越えた連携：従来までの欧米一辺倒とは異なる近くて近いアジアの諸国とのネットワークはこの国の次の世代にとって生き残りをかけた重要な課題である。個人レベルだけでなく組織で出来る事はないのだろうか？

個人主義の国とされるアメリカにおいても、研究者間の緊密な連携やネットワークの見事さは、時に我々を驚かせ、それが世界を先導する駆動力として不可欠のものと見なされていることは衆知の事実である。また卑近な例では、この夏のワールドカップサッカーの悪夢がある。組織力を自負した東洋の島国が破壊的な個人の能力をもつ王国に撃破され、個人の力を過信した王国が、高度な個人技に裏打ちされた見事な連携・組織力を示した自由と友愛の小国に苦杯をなめた。「世界と戦う」という意味においては、我々にとっても共感するところ無しとしない。個を磨き、連携を模索したい、勝手に思っている。

2006年 生体関連化学部会ニューズレター巻頭言より